

## 3 大いなる決断

黒四ダムと太田垣さん

六月十日、私は週末を利用して黒部ダムの見学に出かけた。信濃平野の広い水田では稲の植えつけも終り、はやくも除草が始まっていた。長野県の大町から、約一五キロの延長をもつ立派な舗装道を上ってゆくと扇沢駅に着く。ここは赤沢岳と北ア鳴沢岳の中腹を貫通してある五・四キロの関電トンネルの入口である。標高はすでに一、五〇〇メートル。このトンネルをトローリーバスで通過すると、かつては人跡未踏といわれた黒部川の溪谷に出る。谷という谷は千古の雪を抱え、空はいよいよ高く、山はいよいよ青い。黒部川沿岸は年平均降雨量三、八一〇ミリといわれる多雨地帯で、冬期には平均五メートルの積雪地帯でもある。ここに高さ一八六メートルのアーチダム（世界第四位）が、その巨大な体軀を横たえておる。それから約一〇キロ下流に地下発電所が設けられ、有効落差五六〇メートルで、既設三基の発電機からはすでに二五万八千キロワットの発電が行なわれておる。日本の産業人が何度か夢見てそのつど果すことができなかった夢は、かくして現実となったのである。これは人間が自然に挑み、その執拗な抵抗を排しつつ、遂にそ

の自然のもつ大きい力を、逆に人間に奉仕させることに成功した偉業であるといえよう。

大町からトンネルに至る道、アルプスを貫通するトンネルは、いずれも黒部川の水系を大きく迂回してダム建設用の資材を運ぶために、巨費を投じて造られたものである。当初トンネル工事は、毎日二〇メートルの速度で進捗し順調に運ぶかに見えた。ところが、このトンネルを掘ってゆく間に思いがけぬ碎石帯にぶつかり、一大頓挫をきたした。通常は岩石帯を切り開いてトンネルをつけてゆくのであるが、当初の地質調査では判らなかつた七〇メートルに及ぶ碎石帯に出くわしてしまつた。それは大量の海綿状の水が、一平方メートル四五キロの水圧の下に集中的に涌出する軟弱層で、工事は一寸も進まない危機に見舞われた。一時は工事を断念すべしという議論までが出る始末であつた。

時の関西電力社長は太田垣土郎氏であつた。彼は技術家ではなかつたが、全日本の土木の最高の頭脳を集めて、この難関打開に協力を求め、八億円の失費と七ヶ月の苦闘を重ねて、遂にその克服に成功し、黒部ダム建設の第一のハイ・ハードルを越えることができたのである。その間の太田垣氏の苦悩は想像を絶するものがあつたことであろう。彼は孤独な事業の鬼となつた。彼は遂に屈しなかつた。そして見事に成功したのである。そもそも、このダムと発電工事には、五一億の巨費を投じ、延べ一千万人の労力を注ぎ込み、一七一人の貴い犠牲者を出した。それだけ

にこの工事に手をつけるべきかどうかには、関西電力の社運をかけた大きい決断が必要であった。それだけではなく、日本産業のプレステージをかけた大きい勇断が求められていた。関電役員会では、何回も何回も息詰まる討議が続けられた。大勢は慎重論に傾いていた、というのも無理からぬことである。その時に山のような決断をされたのは、他ならぬ太田垣氏であった。また工事に着手してからも、何十回となく工事現場に足を運び従事員と労苦を共にし、また一片の釘、一握りのセメントの節約を勧奨して回られたのも、他ならぬ太田垣氏であった。

この工事は昭和三十一年八月に始めて三十八年六月に見事完成した。それからしばらくたって当の太田垣氏は他界された。大きい決断、不断の緊張と苦悶という一連の重荷とそれからの解放が、彼の生命を奪ってしまったのではないかとさえ思われる。

人間は一生に一度か二度、大きい運命的な決断を迫られるものであるという。日常の些事はあくまでも些事であって、男子の深く拘泥すべきことではない。一生に一度か二度訪れるであろう大事には、それに処する進退と去就について、自らの決断を誤ることがないようにしたいものである。黒部ダムは何処にも、故太田垣土郎氏の名前が見えなかった。彼は名を残すことを欲しなかったようである。しかし彼の大きいなる勇断は、黒部の深谷に光彩を放つことであろう。